

ギリシア・ローマ古典劇集

アイスキュロス ソポクレス
エウリピデス アリストパネス
プラウトゥス テレンティウス

呉茂一・高津春繁・久保正彰・
中村善也・松平千秋・樋口勝彦
・泉井久之助 訳

世界文学大系

世界文学大系 2

ギリシア・ローマ古典劇集



世界文学

昭和34年6月30日発行

定価 500 円

訳者代表 呉 茂 一

発行者 古 田 晁

印刷者 多 田 基

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話 (291) 局7651

目次

アイスキュロス

アガ멤ノン

供養する女たち

慈みの女神たち

ソポクレス

アンティゴネ

オイディプス王

コロノスのオイディプス

ピロクテテス

エウリピデス

メデイア

トロイアの女

呉 茂 一訳 6

呉 茂 一訳 39

呉 茂 一訳 60

呉 茂 一訳 81

高 津 春 繁訳 105

高 津 春 繁訳 131

久 保 正 彰訳 161

中 村 善 也訳 189

松 平 千 秋訳 214

バツコスの信女	松平千秋	239
アリストパネス		
女の平和	高津春繁	267
蛙	高津春繁	299
プラウトウス		
捕虜	樋口勝彦	339
テレンティウス		
アンドロスから来たむすめ	泉井久之助	373
古典劇の伝統	ギルバート・マリ	403
解説	高津春繁	417
ギリシア・ローマ演劇史年表		429

装幀 庫田 發

アイス
キュ
ロス

ギリシア三大悲劇詩人アイスキュロス Aischylos Euphorionos は、伝によるとアテナイから西北へおよそ二〇キロのところにあるデメーテル女神の名高い霊地エレウシスで前五二五年頃生れた、とある。父はエウポリオンで、その古い神職の家柄に属していた。ほぼ抒情詩人ピンダロスと同年輩で、ソポクレスよりおよそ三〇歳の年長、エウリピデスとは四〇年を隔てる。二〇歳台で劇作家の列に加わったが、最初の優勝は比較的小さく、前四八四年（四〇歳頃）となっていて、以降一二回の優勝を重ねている。彼の作品として名の伝えられるもの、古写本の目録に七二篇、他に七篇を加え、七九篇に達するが、スーダ（古代文学辞典）によると九〇篇に上ったらしい、仮りにこれを悲劇上演の例で律すれば、彼の優勝率（一回四篇として）は五割を超え、非常に高いといわねばならない。

彼の生涯に最大の事件は、おそらく前四九〇年の第一ペルシア戦役に出征し、馬拉トンの野で戦ったことであろう。彼はこれを終生誇りとし、自作（と伝えられる）墓碑銘にもつばらそのことを述べているが、兄キュネゲイロスはこの戦いで没した。その後の彼の生活について私たちはあまり詳細を知らされていない、ただ前四七〇年頃シケリア（この地方にはギリシア人が多く移住し、栄えた町も多かった）に西地中海の覇権を握って、大都シラクサいの僭主として聞えたヒエロンの招きに応じて渡り、自作の悲劇「ペルシア人」を上演した。彼はまたヒエロンの建設したイトナ市のためにイトナの組曲四篇を制作した。この逗留は短期間らしく、四六七年にはアテナイにいて「テーパーイにむかう七将」

を含む三部作を上演し、四五八年には「オレスティア」劇を上演優勝した。その後まもなく彼はふたたびシケリア島に渡って、ついに四五六年同島のゲラ市で没した。一説にはあたかもその頭上を一匹の亀を掴んだ驚が飛翔し、彼の禿頭のまぶしさに目が眩み（南国の陽光はかほどにも強烈であった、一伝に、頭を岩と思って、というが非論理的である）思わず亀を落したところ、狙いがわず彼の頭に命中して即死したというが、はなはだ怪しい。時に六九歳であった。

ところで彼の作品であるが、九〇篇と上に述べたうち、現代にまでだいたい完全に伝わるものは七篇（これはローマ帝政下の二世紀頃、古典教科書用としてまとめられた選集に基いている）だけで、ほかには七九篇の戯曲の名前と五百あまりの断片（その一部はエジプトから発掘されたパピルス片で、この中には「エオベ」の二二行、「ミュルミドン族」の三六行、およびサテュロス劇の見本として貴重な「網引き」や「イストモス祭へゆく男たち」などがある）が、物ほしげな学者の誘惑にと残されているばかりだった。しかしこの七篇はなかなか有能で、彼の代表作ともされるオレスティア三部曲（「アガメノン」と「供養する女たち」と「慈みの女神たち」より成る）のほか、古来神人論として幾多の文学者を動かしたプロメテウス劇の一、「縛られているプロメテウス」、「テーパーイにむかう七将」（四六七年上演、テーパーイ劇の一、オイディプス王の二人の息子が相戦って刺し違えて死ぬ）、ペルシア戦役になちなむ「ペルシア人」（前四七三年上演）、ダナオスの五十人の娘の運命に取材した「救いを求める女

たち」を含んでいる。制作年代もだいたいこの頃で（あとほど古い）あるが、最近出土したパピルスに、このダナオスの娘たちを扱った三部作と同時にソポクレスの劇が上演されたとの記録が見え、本劇の推定年代をいちじるしく引き下げるので問題とされている、この劇は三部作中第一曲なので、とくにコロスの部分が多いと考えられる。

これらの悲劇を通観して感じられるのは、アイスキュロスが非常に奔放で雄大な想像力の持主、気宇の高邁な詩人だったことだ。「陶酔裡に（夢中に神興に乗って）悲劇を制作して」と伝えられるものも、復讐の女神らの狂舞、あるいはダレイオス王の亡霊の出現などは、彼でなくては着想しえないだろう。その一方、詞句の磨きが不足だとか優雅でないとか荒削りだとか（ロンギノス）、あるいは雄大な荘重ながら大袈裟に過ぎ、粗野で整っていない（クインテイリアヌス）などの評が古来加えられてきた。実際、前五世紀末の華やかな古典ギリシア人、アテナイ市民はやがてアイスキュロスの荘重嚴肅を敬遠しだし、ソポクレスの均斉やエウリピデスの華麗なる激情の展開に走った。しかし彼にはアルカイック彫刻の傑作にも比せられる強い力強い美しさ、ドリス円柱の社殿のような壮麗さ（それは南国の強烈な陽光にも負けない）が窺われる。本当の詩人、偉大な思想家で予言者、こんこんとして尽きない空想と構想力の持主、力強い、とりわけて男性的な（まさしく馬拉トンの野の勝者である）リズムと調子と、それはまさにすぐれてギリシア的な、古今にも類の稀な力と正義との文学といえよう。（呉）

オレスティア 三部作

アイスキュロスの「オレスティア (Orestia)」三部作は、西紀前四五八年の春に、アテナイのディオニッソス大劇場で上演された。アイスキュロスの現存する戯曲中では最後、彼の死ぬ二年前の作である。この劇がギリシア悲劇中でもとくに重要視され、とくに注目されるのは、それがこの詩人の代表作であるということ、同時にギリシア悲劇における三部作様式 *trilogia* の典型たという点にある。三部作の構成にもいろいろあるうが、ここではそれが単に一つの題材の三面を示すとか、三つの挿話を扱うとかではなしに、もつとも有機的な構成、つまりAの結果が必然的にBとなり、Cは必然的にBの展開であるという、内容的な関連をもっていて、いわば一つの劇を、三幕で形づくるのにも似ている。ただこれが三幕でなく独立した三曲であるのは、それぞれ曲のもつ独立性——形式上、内容上、また意図の——によって示されている。

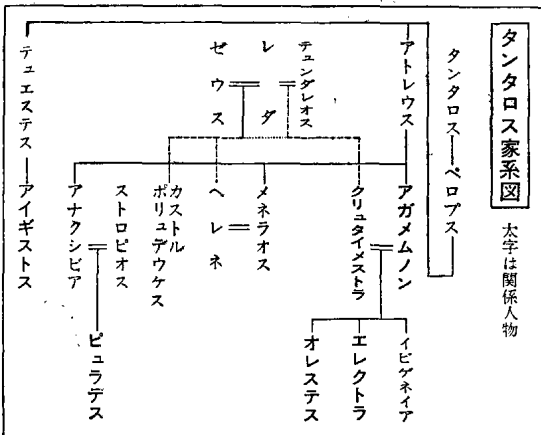
ギリシア悲劇は、観客がその筋をだいたいにおいて諒知していることを前提している。それゆえここでも、この三部作のおおよその骨組みを前もって述べておくのが適当であろう。オレスティア、すなわちオレステスの物語というのは、紀元前千三百年頃、当時ギリシア半島に勢力を振っていたミュケナイ *Mykenai* の王 (とつづきされている) アガメムノ

ン Agamemnon が、王妃クリュタイメストラ *Klytimestra* とその情人アイギストス *Aigisthos* の謀計により殺されたのを、後に息子オレステス *Orestes* が帰国して母と情人との二人を刺殺し、仇を報じた物語である。しかしこの話には前置きとしてアガメムノンの一家、それは曾祖父のタンタロスに発し、祖父ペロポスから父アトレウスを経て、アトレウス家 (アトレイダイ) ともペロポス家 (ペロピダイ) とも、あるいはタンタリダイとも呼ばれる旧家ながら、代々、神寵に倣ひ、暴慢の行いをくり返し、ことにアトレウスとその弟テュエステス *Thyestes* とはミュケナイ、アルゴスの王位を争い、血を血で洗う血族間の殺戮を事としてきた。このタンタロスが子のペロポスを煮てその肉を神々の饗宴に供えたこと、アトレウスがテュエステスの幼い子供らを肢解してやはり肉を父テュエステスに喰わせたことなどは、劇中にたびたび示唆されている。アトレウス家アガメムノンの館は、これらの子供の血にまみれているのである。

そしてアイギストスはこのテュエステスの末子に当り、幸いにこの難を免れたものであった。彼の不義もいわば一種の復讐の行為であった。しかしこれらの暴慢も非道も、やがては正義の裁断を受けなければならぬ、血を血で洗う報復のくり返しでは、永久に正常な平和な社会正義は求められないからである。しかしアイスキュロスがこの三部作で目指すところは単にこうした社会劇、倫理劇、一種の思想劇ではなかった。それはたしかに深い宗教的な基調によつて、正義の愛によつて浸透されている。しかしそれら以上に、遙かに強く、三曲ともにとりどりの趣きをもつて壮大な構想の下に、深い人性への

洞察と、力づよいデモーニッシュな人物の動きを、華麗な幻想の飛翔と雄勁な詞章の駆使によつて現前させる。このオレスティア劇を、「人間の心性がつくり出した最大の制作」(スインバーン) という詩人があるのも、もつともであらう。なお使用原典については、だいたいいま *Mazon* (パリ、ピュダ版) に則り、「アガメムノン」は *Fraenkel* (やや古い) や *Blass* の読みや注釈も参照したが、三曲とも *Rose* の新しい注解 1957—8 によつて益を受けることが少なくなかった。

タンタロス家系図 太字は関係人物



アガメムノン

オレスティア三部作の序篇として、ここではトロイア遠征軍の総師たるアガメムノンの凱旋から、王妃の深い企み、やがて凶行の成就を経て、合唱隊を形づくるアルゴスの長老たちの不安と恐慌に亘り、陰謀の片割れで王妃の情人であるアイギストスの登場と豪語に終る。序段としては屋上へ狼火の見張人を登せて、戦の不安と市民間に漲る暗い気分、不吉な予想を叙べさせ、ついでトロイア陥落の華々しい火光を空想の天にあげる。やがて凱旋を伝える伝令使から王妃の登場まで、全曲の半ばは、濃い不安と劇的な緊張の醸成に費されている。

しかし本篇の眼目は、強靱な意志で烈しい憎悪と怨恨を巧みな修辭に秘める王妃クリュタイメストラの動きと、その対比者としての、もとトロイアの王妃で今は捕虜として屈辱を強いられるアポロンの巫女（神を裏切った罰としてその予言を人に信ぜられない）カサンドラの絶叫にある。その登場から自分の死の運命を予言しつつ城内へ歩みを運ぶまで、彼女の一举一動、悲痛な叫びは、絶大な緊張と不吉な予想で場内を充たす、詩人のすぐれた創造である。一方、アルゴスの長老たちのコロスは、アイスキュロス独特の高いモラルと深い宗教的な思念で、アトレウス家の運命と執念の末を、傲りと暴慢とがやがてはかならず破局をもたらすことを、人はただ苦悩

によつてのみ学ぶことを、行為にはかならず報いのあることを、歌いつづける。その基調は深い、むしろ一神教的な、ゼウスの正義と、摂理への信仰であった。こうして外面的には詐謀と不正との勝利に終る本曲は、つづいて第二第三の段階へと、復讐と正義（それは罰でも償いでも、権利でもある）へと、導かれてゆく。

登場人物

物見の男

合唱隊

報せの使い

クリュタイメストラ

タルテュピオス

アガメムノン

カサンドラ

アイギストス

舞台

アルゴス城内王宮の前、奥の扉口にはいくつかの神像、その前に祭壇をしつらえ、下つて会議の場席。時は夜明前。

アルゴスの長老たちより成る。

アルゴスの王妃。

伝令使。

アルゴスの王。

トロイアの王妃、いまは俘虜としてアガメムノンに侍する。

王の従弟で王妃の情人。

物見の男〔屋根の上で独白〕 神さま方にもお願いしてきたことよ、こんな骨折りはもうまっぴらだ、まる一年のあいだも見張りをつづけ、アトレウス家のお館の屋根に抱かれて、犬みたように、臥せるなどというのはな。夜出る星の数々も、もうすっかり覚え込んでしまつたわ。なかでも冬や夏やを人間の世にもたらずという、空にひとときわ著く見えて光りかがやく大星どもはな、沈む時刻も、またそいつらが昇る時刻も、みな識っておる。しかもまだ松明の合図を見張りつづけてゆくとは——トロイアの郷からの報せをもたらず火の煙い、攻めとつたという信号をな。それのもとはいえ、一人の女が男のようなたくらみを思いめぐらす心のせいよ。して夜の間も落ちつかず、雨露にも濡れほうだい、夢さえも私の臥床を訪ねることはよもやあるまい。というのも眠りの代りに、恐さがいつも控えとるでな、それで眠たとて、まぶたをしつかと合わせもできぬ有様だよ、また気が向いて歌うたりなり口ずさむなりする時分には、それも睡気さましに刻むのに、よい癒し薬といえようでな、——このお館の不仕合せを、嘆息まじりに泣いてることよ。けして昔のように、申し分ない目に逢うるとはいかぬでよのう。だが、こんどこそいゝんな苦勞も幸いにまぬがれようかえ、吉報をもたらず、火明りが、

闇の夜のまに見えるからは。

〔遠くの空が明るくなって、炬火の影がはるかに見える〕

おおまあ、嬉しい火の輝きよ、夜ながら屋間のように照りわたり、数知れぬ喜びの歌舞をアルゴスの町に、この仕合せを祝うとて、しつらえさせるものかよ。

ほうい、ほうい。

アガメムノンさまの奥方に、お報せしまする、はつきりとな、一刻も早う、臥床からお起き召されて、お館じゅうに、この火照りにむかい、とよめき渡る喜びの朝祝ぎ歌を歌い上げられましよう、もし真実、イリオンの城が陥落しましたなればな、この松明がいかさま、報せてくれる手はずどおり。すりや私自身が、まずいち早く、舞歌の先触れをしようかえ。ご主人方のよい仕合せは、つまりわが身のためになるうもの、この火の番の賽の目が上乗に、三つとも六と出たからにはな。

〔しばらく口をつぐんで沈思する体〕

じゃあまず、お館の殿様がお帰りなされて、そのなつかしいお姿にこの手でもってご挨拶をすることができませんよう。ほかのことは何も言まい、でっかい牛が舌の上に乗ってしもうた。この館みずからが、もし声を出せたらならば、すっかりとしゃべるだろうよさ、何もかも。いや、知ってる者には、私の文句

もよく解るつもりだが、知らぬ者には、内証、内証。〔見張り番、退場〕

〔しばらくの間、見張りの報せによつて起されたらしい館内のざわめき、火の輝き、人の喜びが叫び、つづいて音楽の音、舞台正面の祭壇にも火が燃やされる。アルゴスの長老より成るコロス、パロドスより登場、はじめに道行の歌（四〇—一〇三）、つづいて第一の合唱部スタシモン（一〇四—二六八）〕

長老らのコロス もう十年目じや、この年でな、

プリアモスにむかい

いかい懲らしめを加えるとて、

メネラオスの殿 またアガメムノンと、

大神ゼウスより相並ぶ玉座と王笏との

高い威権を受けたもうた 二方のアトレウス

家の御あるじらが、

千艘の船にもあまるアルゴスの兵どもをこの

郷より、

手だすけの軍勢として

率て立たせ たもうてからが。

怒りに燃えて 凄じい勢いに雄叫びながら、

禿鷹のようにじや、それは子供を奪られた

尋常ならぬ嘆かに、巢の上空を

翼を機に羽ばたきながら、

ぐるぐるめぐり飛び交うたもの、

雛が臥処を護りのわざも今は空しく。

天上に それを聞くもの、あるはアポロン、またはパアン、またゼウスなりとも、鷲鳥の高らかにまた悲しげにも 叫ぶを聞いて、わが眷属らを なぶり害めたその科を罰しようとして、後より復讐神らをつかわされる。

まずそのごとくに アトレウス家の御子らをパリスに向けて、

賓客の掟を立てる ゼウス、なお広大無辺の御神が

遣されるのじや、いくたりも男を持つ 女のために、

数しれぬ 精根を涸らす格闘を——

塵泥に、膝をまぶせ、

婚礼の前触れに さし棹を

おっべし折りつ、——ギリシア方の軍勢にも

はた同じく

トロイア勢にも 課せられようとな。いまま

なおまだ

そのとおりにじやが、ついには 定めのように

〔1〕賽遊びは古くから行われ、ギリシア悲劇にもしばしば現れる。四面との六面立方のとあり、二、三、四個を用いた。ここでもちろん三個の使用で、つまり最高大吉を示すものである。一ばかりの時が最下。

〔2〕ヘンキオオスに「自由にもが言えないことについての謎」とある。

〔3〕鷲はゼウス神の使鳥として天上に飛翔する。アポロンの子言の神、パアンは山野の守護神として。

〔4〕Zeus Xenios クセノス即ち「知己の間柄、また宿を貸したものを」を護るとされたゼウスの機能を表わすもの。

なろうぞ。

薪も燃やさず、酒もせず、
火氣を用いぬ供御もいらすに、

(き)

ひどい片意地も、いつかは宥められる日が来ようというもの。

だが私は、寄る年齢にはや体も弱り、やきたいもなく、

そのおりの援け軍にも取り残されて、
小童同然の力をば

杖にささえて このとおり待つてゐるのじゃが、

よしんばまだ 胸の中からようやく湧いて出る

稚い芽ざしが 年寄と似かよふと言おうと

て、
軍神のことなどは てんでまだ心にないのを、

年を取り過ぎた者らは 何とあろうか。葉並も枯れた

木同然、三つ足で 街道をよろほい歩くは、
まづ昼間の夢みたように、やきたいもない

幼児と すこしも 変らぬ。

したが、あなたさま、テュンダレオスの

お娘御、お妃のクリュタイメストラさまが、
何のご用か。また何のお報せか。それとも何

か耳にした

ことでもあつて、何かの便りを
信じなされて、お布令を廻し 贅の祭を行わ

れるのか。

この町に在すほどの、ありとあらゆる御神々、

天つ神、地つ祇、

門を護る神、また市をもる神々の、

(き)

祭壇は 献げものを 焼く火にけぶり、
てんでに燃やす あかしの火照りは、

神聖な膏油、王家の倉から出た

握餅のじゃ、いつわりのない

やさしげな説得に なだめすかされ、
天まで届けと 立ちのぼつてゆく。

それらのわけを お妃さまの力の限り、また
差支えない限り 説き明かされて、

私たちのこの気づかいの 癒し手にもおなり下されませ。

いや、それ(気づかい)も時には結句凶しい
ことになるものながら、

(こ)

時にはまた 贅まつりから明かされる

やさしい希望が 遣りようのない気のわずら
いを払ってくれよう。

語るのは 私共にも許されてること、盛りの
年の
人々にふさわしい 出立の

励まし言葉を。というのもまだ

神界から 説得の 力が通う、
年とともに はぐくまれてきた

ものもろの 歌の力じゃ。

すなわち このアカイア国の

王座をならべる二人の君主、ギリシアの 若
殿ばらの

心をあわせる大將方を、

弓矢を執つて仕返しの際きにと、きおい立つ
鳥の兆が

(こ)

トロイアの地へ 出で立たせたのじゃ、
鳥族の王者が

船勢の王者たちへな、黒い鷲と

背のほうの まっ白い鷲とが、
宮のすぐ間近に 姿を現し、

しかも槍を執る 右手の方の
人目にも著いところに、

仔を胎にいっぱいもつた
兎の族を喰うてたそう、

もうちょっとで 巢につくとこを取つ捕まえ
てな。

あわれや、あわれといえ、だが幸いがまさり
ますよう。

(こ)

さて用心怠らぬ 軍付きの陰陽師は、
そのとき 気風も相似て猛々しい

アトレウス家の殿二人を見て、
すなわちこの兎を喰う鷲こそ

遠征軍の大將を指すものと悟つたのじゃ。
してこのように占い解いた、

時を経て、この出征のいくさは
ブリアモスの都を攻め取るであらう、

またその城壁に入り込む前に、
あらゆる公けの宝もみなむりやりと、

運命により奪いつくされるであらうと。
ただその前に、天つ神の御憤りが、

(こ)

トロイアを抑える櫓^{こきやう}ともして
この地に集う軍勢^{きんせい}へかかり、
暗い影^{かげ}など被せぬようとな。

尊いアルテミスさまは、父神の翼^{はね}をもった
犬のやからに怨みを抱いておいでじやから。

憐れな鬼をその子^こぐるみに
産の前に喰うてしもうたゆえ、

さてこそ驚^{おどろ}どもの饗宴^{けうえん}をおぞましゅう思^{おも}は
れる。

あわれや、あわれといえ、だが幸^{さいわ}いがまさり
ますよう。

よし、いかほどか、聖^{よと}い女神^{めがと}よ、獐^{しやう}猛^{もう}な荒獅^{かうし}
子^こどもの

人なずきせぬ仔^こをよろこびたま、
またありとある山野に棲^すまうけだものどもの

乳を恋^こう幼獣^{ようじゆう}をいとしみまそうと、
この兆^{きざし}には ふさわしいしるべの途^{みち}をおし
のよう。

鳥どもが示したしるしは

吉兆^{きしやう}ながら、難もまたないではないゆえ。

だがさて我らの呼ぶは世直しの神、パイアン
さま、

どうぞしてギリシア軍に、長いこと

船出を止める向い風^{むかいふう}などが吹きつけ、
海を渡れぬことなどないよう。

してもう二度とは 掟^{おきて}に反^{かへ}く
贅^{えい}などすすめたまいませぬよう、願^{ねが}ちもなら
ぬ、

(四)

肉身間にいさかいをつくりだしては、
夫^そに反かすもことになるもの。恐ろしや、
まだ今も絶えず家に執^とりつき、

執念^{しつねん}ぶかく子の仇討^{かみうち}をたくむ心の
その恨み憤^いりにはなお変りがない、と

このようにカルカスどのは、門出^{かどで}の折の
鳥占^{とりうらひ}いから わが君の御家^{みけ}に対して、

いかい仕合せをもまたこめた 予言^{よげん}をいとも
おごそかにこそ言われたものだが、

それといま声をあわせて、さ、
あわれや、あわれといえ、だが幸^{さいわ}いがまさり
ますよう。

大神ゼウス——そも真実は何者にまします
とも、

こうお呼び申上げるのを嘉^よしたまえば、
この御名^{みか}により祈^{いの}り上げましよう。

あらゆることを量^{はか}りくらべても、
ゼウス御神^{みかみ}のほかには、もしいたずらな

わずらいを この胸^{むね}の中から
本^{ほん}当^{たう}に棄^すて去^さらうとなら、なぞろうべき

御方^{みかた}を 他^{ほか}には持ちませぬ私もゆえ。

その昔、広大の力をたもち

すべてにまさる勢^{いきり}いに驕^{おご}ったものも、
かつてあったと証^ししさえ 今はできない。

その次に起ったものも、三本^{さんぽん}つづけの
勝^{かち}にやられて、去^さってしもうた。

だがゼウス神へと 心をこめて

勝利^{しり}のほまれをささげる者こそ、
なべてに正しいおもんばかりをもつといわれ
よう。

悩^{なや}みによつて学ぶことこそ、

この世の掟^{おきて}と定めたもうて、
人間を思い慮^{はか}りに導いた御神なれば。

されば眠る間^まさえ心のまにに、痛み疼^{うず}きを
忘れもやらぬ 悩^{なや}みこそ、血^ちをしたらせて、

望^{のぞ}まぬとてもおのずから 正心^{せいしん}をもたらすな
れ。

たぶんは尊^{たうと}い舵^かをお取りの御神の
力^{ちから}づくでの情^{なさけ}であらうが。

(五)

されば当時も ギリシア方が船軍^{ふねいくさ}の
総大將^{そうだいしやう}たる 年上^{としうへ}のそのおん殿^{との}も、

陰陽師^{いんやうし}にはいささかの咎^{とが}もかけずに、
うちつける運命^{うんめい}のきおいの風に靡^{なび}きたもうた。

ギリシアの兵士^{へいし}どもが 船出^{ふねで}のかなわぬ

(1) すなわち「板^{いた}について」。オイディプスの解いたスフ
インクスの謎より。

(2) 父神はゼウス大神、驚^{おどろ}のこと。ゼウスの使鳥^{しきやう}なるゆえ
にいう。

(3) アルテミス女神は狩猟また山野の守護神である。

(4) 天地開闢^{てんちかいびやく}の折の天、ウラノスを指す。

(5) ウラノスに代つて主權^{しゅけん}を握^{にぎ}ったクロノスをいう。自分
の子ゼウスのために追われた。ギリシア神話、世界の始め
参照。「三度投げ」とはレスリングで、三度つづけて投げ
倒して優勝すること。「慈みの女神たち」五八九行参照。

(6) アガメムノンのこと。陰陽師はすなわちカルカス。

兵糧の欠乏から愚痴を言つたおり。
カルキスの向い岸、アウリスの浜の潮が
寄せては返す ところに泊つて。

しかも疾風はステュルモンから吹き寄せやま
ず、

船出を延ばし、餓えをもたらし、あいにくと
港に押しこめられた

人々をまよわせてから、船もそのうえ
船具まで さんざんに痛めつけては、

くり返し 長いこと待たせておいて
アルゴスのますらおどもが精粹を

濁らしていった。さてその折に
はげしい嵐をのがれる途と、別な手段を

——大將方にはいちだんと きびしいなが
ら——

アルテミス神をひきあいにして、陰陽師が
宣り上げたことであつた、さればアトレウス
家の

殿たちは 大地を杖で打ち叩きつづ
涙をとどもあえなかつたが。

年長の殿は 口を開いてこう言いたもうた。
「(その命令に)従わぬとなら わしの運命は

きびしきろう、

だが、もしわしがわが家の宝ともある、
あの娘を屠らねばならぬとなれば、

父親のこの手を、乙女を戮したその血潮もて
祭壇の辺に穢すとなれば、これまたいかにも

きびしいこと。そのいずれがそも禍いを欠い
ていようか。

いかなれば このわしが 味方に捨てられ、
船隊を失うことがでしよう。

兵士どもは 嵐を止める犠牲として
乙女の血をこそひたぶるに 乞ひ求めるが、

(神意ゆえ) その願ひもまた
正当であらう。されば幸先よいようにせよ」
と。

こう必然のくびきを身につけられてからは、
神をおそれぬ、また淨からず、神意にもとる、

心の持ち方、風向きに、氣を入れ変えて、
それから 如何なこともやつつけようと決

心された。

正しからぬおもんばかりは 人間を向う見ず
にもするものゆえ、

無下な、禍いの源をなす思い違いはな。
そこでともかく 国王は、妻仇討ちの

戦さを援け、かつは船手をすすめるための
初穂の献げと、己が娘の

屠り手にさえ、なろうとされた。

その祈りもまた 父王へのせつない頼みも、
乙女がいのちさえ、戦さにはやる

大將たちは 願ひもなおしなかつた、(三三)
して父御の君が 祈禱の後で扈從らに指図し

たのは、

牝山羊をさながらに 祭壇の上へと、

衣にひしと取り縋り、心をこめて頼み入る
おん娘御を、高々とつむけにして

引き上げさせ、また美しい顔立の
唇をもれて、家への呪い言葉などが

出ぬようにと わりやりにも

声をさえる 櫓の力にまかせた。

サフラン染めの 衣を地に注ぎかけつ、
贅の儀にあずかる者らを 一人のこらず

憫れみを誘う眼ざしの矢で
乙女は撃つたが——していかにも

描かれたもののよう、言いかけたげな
姿に見えた、その昔いくたびとなく

にぎやかな父王の宴の席で
歌いかつ舞うたおりの、その清らかな

乙女の声で いとしい父御の
三度目の濯酒の式に 祝いの讃歌を

ま幸くも 歌い納めたものであつたに。
それから先は 見もせねば、言いもすまい、

カルカスどのの術はみな 成就せぬはずはな
いのだ、

だが苦勞した者だけが 悟りに
あずかるというのが 道のおきて。 (三四)

未来のことは、起つたときに
いつかは聞こう、それまでは構わぬがよし。

それは前から嘆きをもとめるに 等しいこと。
いずれは朝明の光とともに はつきりとなろ
うものゆえ。

さしせまつてのところは、事が都合よく運びますよう、

このわれわれにとり、すぐと身近なアビアの国の

ただ一つの護りの城寨が 望むとおりに。

〔王妃クリュタイムストラ、宮殿の門に現れる〕

ご威勢をかしこみまして、こう御前に参りました、クリュタイムストラさま、ご主君である方の、奥方を敬いまつるは道にかなうこと、背の殿の御位が、空いている場合には。さてこのお布令はよいことをお聞きなされてか、あるいは否か、吉報をお待ち望みで祭の式をお勤めなされる、その事由を伺いましょうぞ、心やさしく。よし仰せられずと、恨みはいたすまいなれども。

クリュタイムストラ 〔長老らに向つて〕 吉い報せは、さあ、諺にもあるとおりに、この朝明けが、心やさしい母の夜からもたらしすすよう。だがお前方は、聞こうとかねて期したよりも、もつと大きな嬉しい報せをお受け取りでしょう、プリアモスの都を、アルゴスの兵どもが陥れたというのですから。

コロスの長 何とお言いで。お言葉をしかと掴みかねましたが、信じがたさに。

クリュタイムストラ トロイアはギリシア軍のものになったと、これでもはつきりとはしませぬかえ。

コロスの長 歡喜がこの身を揺すります、涙

さえ呼び出しまして。

クリュタイムストラ いかにも、そのやさしいまことを、お前方の眼はおのずと見せていますのに。

コロスの長 でもどうしてそうお信じて、何か証拠がござりましょうか。

クリュタイムストラ いかにも、むろんのことです、神さまがお欺しにならないのなら。

コロスの長 そんなら夢のお告げをでも、たやすく信じ敬われるとか。

クリュタイムストラ いえ、重たくなった心の思いなしなど相手にしません。

コロス それとも何か、おぼろげな気配にでも唆られてのことか。

クリュタイムストラ まるで幼い娘みたいに私をひどくお言いだわね。

コロスの長 では何時ほど前、その町が落城したと仰せられるので。

クリュタイムストラ いまこの朝に、明けてゆくやさしい夜のあいだのことです。

コロスの長 そんならいったい何者がその報せをこうも早く持つて来ましょう。

クリュタイムストラ 〔火の神〕へバイストスです、イーダの山から火をあかあかと照らし送つて、松明は松明へと、焰の飛脚をここまでよこした、というわけですね。イーダはま

ずレムノスにあるヘルメスの岩へ、その島からは大篝火をアトス岬のゼウスの峯が、三番目に受け継いで一と息に、海原のひろい背も

押し渡ろうほど、いそいそとして、進んでゆく燈明の、高く燃え立つ火の勢い……

合図の狼煙は、金色に耀く光を、太陽でもあろうくらいに、マキストスの見晴しへと、

伝えてよこせば、その嶺は些の猶予もなく、また他愛なく睡気に負けて伝令のつとめを怠りなどせず、〔次へと渡し、〕こうして遠く、

松明の光はエウリポスの流れを越えて、メッサピオスの守人へまで報せて来ました。

(1) エウロピア島の市・アウリスはほぼその対岸にあるポイオタイアの僻村で、なぜこの地にトロイア遠征の船軍が集められたかは明らかでない。あるいはかつてポイオタイアから出た遠征軍の記憶ではないだろうか。

(2) トラキアの西部にある大河。つまりトラキアの方、北方の意。

(3) 予言者、占い師カルカスのこと、すなわちアガメムノンが女神に対して犯した罪のために、その初子たるイピゲネイアを犠に上げれば無事に航がかなうとのうらない。

(4) アガメムノンを指す。

(5) 饗宴の席においては、その終りに神々へ灌酒をする。その第三は守護のゼウス神 Zeus Soter にささげるものとされた。それにつづいて神々へのバイアンの頌歌が歌われる。プラトン「饗宴」篇末尾参照。

(6) この一条異論異説多し。「このアビアの護りがわれわれにとつてはいちばん身近な問題である」の意に解した。アビアはペロポネソス半島(アルゴスの所在)の古名といわれる。

(7) 夜の異名 euphrosyne(心よい、やさしいもの。euphrosyne である)を、上の長老たちの語中にある「心やさしく」にかけたもの。

(8) エウロピア中での高い丘。

(9) 北部ポイオタイアにある。

それをこんどは積み上げた枯草に火をつけ、その人らがまた先へと、篝火を焚き代えて送る、こうして勢いを増した篝火は、いっこうにひるまず、アソボスの川原も一と息に跳び越えて、照りまさる月さながらに、キタイロンの嶺にむかつて、送り火のつらねの次番にあたつた者を呼び覚ます、その見張りは遠方から順ぐりに伝わってきた光を迎え受け取るなり、言いつけられた以上に燃やし立てれば、ゴルゴビスの入江をはるか光はさし渡つて、アイギブランクトスの峯にまで行き着くと、定めめ篝火を怠らぬようせき立てるのでした。

そのの者らは、すぐせいっぱいに火を燃やし上げて、大きな火焰のひげ房を立てる、そのほむらはサロニカの江のわたりを見下ろす山鼻までも遠く越えて射すほどに、さあ照り渡すなり、さあ届いたは、都に隣るアラクナイオンの高峯、その見晴し。そこからこんどは、このアトレウス家の宮に届いた、その輝きは、あのイーダの山の狼煙火の裔と言つていいのでしよう。

私が定めた松明運びの競走とは、こういうふうに、次から次へと受けついで、果し終える手順になつて、その優勝者はつまり初めと終りとに走る者です。

さあ、これが、トロイアから私のもとへと夫が便りを送ってきた、という証拠、またその確かな割符だとおわかりでしょう。

クロス 神さま方に、ではくり返して、奥方さま、お礼を申し上げます、でも今しがたの物語を、いまだ一度、委細にお伺いして、お話の一部始終に感服しとうございます。

クリュタイメストラ トロイアをギリシア軍が今日という今日占領した、はつきりと、市の中に紛れ合はない叫び声が聞えるようだ、酔と酒とを、おなじ一つの器に入れたら、互になじみも合わず、別れてゆくとお言いだろう、そのように、征服された者と、征服者たちとの、声音には、はつきりと、めいめい別な仕合せを聞き分けることができる。一方は、屍のかたえにべつたりとすがりついて、夫や、

兄弟や、それからまた生みの親、育ての親の老人にすぎる子供、それらが、今ではもう奴隸となつた咽喉から声を絞り、いとしい人らの運命を一途に嘆く、また一方では、戦さのため、夜の闇もおちつきやらぬいたわりが、兵糧さえ乏しかった者らを、この市がもつほどの朝食へと、今はもう割りあての次第もなしに引き立ててゆく、めいめい（の兵士）が、手当りに引きあてた運にまかせて。それでもう、さつそくと陥れたトロイアの家並へはいりこんで、露天の下で、雨露や霜に曝されるのをやつと免がれ、お大尽さまみたように見張りもいらぬいと夜さを、寝つづけることだろう。

またもし皆が、その市を護る御神たち、占領されたその土地にある神々の御社を、十分

に敬いまつるなら、勝利を得た人々が、こんどは逆に、ひどい目にあうこともなくてすもうに。どうか貪欲のこころに負けて、手をつけてはならないものを、掠めるような考えを、兵隊どもがさつそくにも起さねばよいが。というのも、これから故郷へ無事に帰り着かねばならぬ、往きと戻りの馬道二つ、まだその片方が残っているのだから。それによし軍勢が、神々に罪を犯さず戻らうにしろ、殺された者らの苦しみは、絶えず覚えてはつきまとうもの。たとえ急には癒いが起らないでも、いつか来ぬとは限るまい。

まあ、こんなことが、女の身の私からお聞きの話ながら、でも幸いが、はつきりと眼に見まがいようもないほど、立ちまさつてくれるといいが。私が選んだのは、いろいろなよいことよりも、この仕合せなのですから。クロス 長 奥方さま、いや、まったく分別のある殿方みたくに、お利発なお言葉でござります。私どもが、あなたさまの確かな証拠を伺いましたからは、いかにも宜しく神々をおたたえ申上げるつもりでおります。これまでの骨折りを、十分償うだけの恵みを、与えて下さいましたことゆえ。

「クリュタイメストラ、宮殿の中へ退く」

クロス おお、ゼウスの御主、また親しい夜よ、

すばらしい栄光を もたらした夜、
トロイアの堂塔の上に びっしりと
投網をうち掛け、大人の者も
稚い者も だれひとりとして、
捕われの 大網を 逃げおおせず、
残らず捕虜の 憂き目を見せたは。

いかにも、款待のおおん神ゼウスをこそは
敬いまつれ、
パリスに対し とつくから弓を引きすえ、
とうとう かくは復讐を果したもうた。
的に届かぬとか、または星の界を超えてなど、
むだに矢が 飛ばないようにし。

コロスへ甲へ 人が言えるのは、ゼウスが下す
禍いの物語だけ、
だがともかくも その足跡をたどることなら
身にもかなおう。
定めたもうたそのように 御神は成就される。
あるいは

人間が 触れてはならぬ聖いものへの 礼を
忘れて、これをよし

踏みまじろうとも、神々は、意に介したまわ
ぬ、など
言う人もあつたけれど、それは敬虔を忘れた
ことば。

いずれは、ゆるされぬたくらみの生む
禍い、破滅がいよ明らかに姿を見せよう。
いかにその勢いが 正當以上に 猛しきろう

と、
また家は栄え、財宝に満ちあふれようと。
だが一番よいのは ほどほどなこと。分別の
十分備わつた人間は、万事がちやうど
足りるぐらいいで、困らねば、それが何より。
つまりは富や財宝といえども
驕りに長ずる者にとり 護りとはならないも
の、

正義の神の祭壇を 蔑ろにし、
足蹴にかけて 毀つものには。

あくまでも 無慚な説得の力に押されてのこ
筋書をつくる破滅女神の 抗いがたい娘と言
われる――

しかもそれを救う途とは 一つもない。影
かくれもなく
おそろしい輝きに 禍いははつきりと姿を現
す、

ちやうど卑しい真鍮をさながら、
正義の裁きにおうて、
磨りつけられ、うち叩かれて吟味されれば、
黒い地金を ついには見せる、――

国民に 我慢ならぬ厄介事をしよわせてお
いて、
やくたいたもなく――子供のようには飛ぶ鳥を追
うとならば。

神々として その願い言はいっこうに聞き入れ
させず、

その咎にかかわる者を
罪人とさだめたまおう。
あのパリスの所業もこうしたこと、
アトレウス家の館へ来て、せっかく
賓客をもてなす、心づくしを、
妻盗みもて にじり漬した。

町の者には 楯をよろいまたは槍を執る
出陣のざわめき、また遠征の船支度を
うち任せ、トロイアには滅亡を持参金とし、
ヘレネは 身も軽々と城門を出て失せた、
してならぬことをしおせて。いくたびか
こういって 邸の古い師らは嘆いたことか、
「あわれやあわれ、家館とあるじの殿方、
あわれその聞と、むかしのやさしい人の訪い
よ」と。

いままなお裏切られ、なおざりにされた人ら
の恥おおい
しかもなお 罵りもせず黙す姿を 目に見ら

(1) ポイオティアの東南、アッティカとの境に近く流れる
河。キタイロンは南西境をなす。

(2) ヘシュキオスによると、コリント湾にある入江の名と
いう。アイギフランクトスはメガラの丘陵。

(3) 次に述べるような、勝利者の凱歌と敗者の嘆き叫ぶ声
との、ぜんぶ類を異にする音声。

(4) 原語はアレクサンドロス、パリスは別名である。ヘレ
ネを誘拐したつて罪により、Neus Xenos が彼を主客の
義理を破つたものとして懲らそうとの意。

(5) 人心を説得し和らげて信じさせる力をもつ女神。破滅
はアテー女神である。

れよう、
海を越えて去った女に ひたあぐがれて、
館のあるじは 魂ぬけた藻ぬけ殿とも思われ
るさま。
姿美しくならぶ立像、その艶姿さえ
残る殿には ただ恨めしいもの、
いまは空しい その眼ざしを
思えば 恋も すっかり褪めて。

夢のまに現れる 悩みに満ちた まぼろしは
あれど (四〇)

それも むなし慰めをもたらすばかり、
空しいとは、ひとが手の届くところに見える
と想うに……

その影は 寄りすぎる腕のあいだを 擦りぬ
け、

それからもう 眠りの連れの
夢の翼のつても来ない。

お館にまつわる嘆き、その中をこめるのは
こうしたもの、その上にまだずっと強いもの
ある。

だが世をなべて、ギリシア国を遠征軍が出で
立ってより、

いずれの家も 胸に堪え得ぬ
悲嘆に沈まぬとてはないさま。

まことや、心肝をいためることは たくさん
にある。 (四一)

武夫を 送りいだした家々は その面影を
忘れやらぬに、なつかしいその人の

代りと、めいめいが故里に届いたものは
一つの壺と灰ばかりとは。

黄金商人(軍神)アレスが 両替するのは人
の身体。

その秤をかけるは 槍を揮う戦さのあいだ。
して火に焼いて イリオンから (四二)

故郷の人らに送るのは 酷たらしい
涙にぬれた 重い砂粒、

人の代りの灰をもて ちよつとした
手頃なかめを いっぱいみたして。

その人を悼みながらも、また互に嘆き
かつは称える、戦さのわざにも拙なからず、
血戦の場に 勇ましく殲れたものと、――

それもみな 他妻ゆえに。

こつそりと こう一人がかこてば、
いさかにはやる アトレウス家の殿らへ、

悲嘆にくれる人の恨みは おのずと向う。
またはそのまま イリオンの地に

城壁をめぐって 奥津城を、
姿も損せず保つ者もある、

仇敵の土が その持主を蔽いかくして。

恨みを含んだ 市民らの語る噂は恐ろしいも
の、

衆人のいだく呪いは必ずや償いを求めよう、
気がかりに私らが聞こうと待つのは、

闇にかくれた何かの報せ、
多くの命を害めた者らを (四三)

神々の眼はよも 見逃すまいゆえ。
恐ろしい復讐神らは、正しからずして
栄える者を、何時しかは必ず
くつがえし、その生活を変え
貶しめようぞ。して、いったんこの世より消
え失せれば、もはやどうにも仕方がないも
の。

とりわけて仕合せを 世に評判される
のは危ないこと、高みはとかく

(大神)ゼウスの雷に打たれるならい。
嫉みを受けぬ幸いをこそ われらは望め、

一城一國の攻略者にもなりたくはなし、
さりとはまた 捕われの身となり、
他人に仕えて一生を送るのも いやなこと。

(以下、クロス間の応答)

ありがたい灯影のたよりに
報せはたちまち 市にひろがって

ゆく。だが本当の話かどうか、
誰が知ろう。いかにも不可思議だ、それとも

偽か。

誰がこう子供じみて、弁えを失くしはてよう、
松明の火の 合図を受けて、

すぐさま胸に火をかき立たせ、そのあとから
話が変わるのも 考えないとは。

ご婦人方の唆られやすい、気性としては
はつきりとする前に ありがたがってそう思
うのも 有りがちなこと。

女心の うっかりと一途に信じた